

『カリスマ編集者の「読む技術」』刊行記念
小宮一慶氏×川辺秀美氏対談

今だからこそ 改めて問われる 日本人の「読書力」

小宮一慶氏と川辺秀美氏、ふたりの出会いは小宮氏が主催する「やさしくわかるマクロ経済分析セミナー」において、川辺氏によって企画編集された『東大生が書いたやさしい経済の教科書』（インデックス・コミュニケーションズ）が基本テキストとして選ばれたことによる。今回、川辺氏の処女作上梓をきっかけに、『ビジネスマンのための「読書力」養成講座』など読書論の著書もある小宮氏との間で、読書のもたらす効用をテーマに対談が実現した。

（構成：鈴木ユーリ、洋泉社編集部）

読書の本当の価値は「速読」ではなく、「多読」にこそある

小宮 今年1月新刊の処女作『カリスマ編集者の「読む技術」』（新書y）を読ませていただきました。これは読書というものを科学的にとらえようと試みた良い本ですね。

川辺 ありがとうございます。

小宮 まず内容が硬すぎず柔らかすぎないところがいい。初心者だけではなく本を読むことに慣れている人にとっても示唆的な指摘が多くあります。

川辺 先生のおっしゃるとおり、そこは意識して書いたところです。パッケージとしては柔らかく見えるのですが、読んでみたら意外とガツンと歯ごたえのあるものを目指しました。小宮先生も『ビジネスマンのための「読書力」養成講座』（ディスカヴァー携書）という読書論の著書を上梓されていますが、僕としては「読書術をマクロで捉えた指南書」が書きたかったんです。昨今、「読書論」や「読書術」を扱った本は数多く出版されているのですが、状況として二極化してしまっているように見えます。

小宮 というと？

川辺 ひとつは文芸出身の著者が「熟読」や「精読」、あるいは「味読」今風の言葉で言うなら「スローリーディング」を薦める本。もうひとつは実用書やビジネス書の類いで、「速読」の指南書です。でもどちらも実は基礎体力としての「読書力」がな

いとできないことなんです。だから僕はその基礎体力が身につくものが書きたかった。

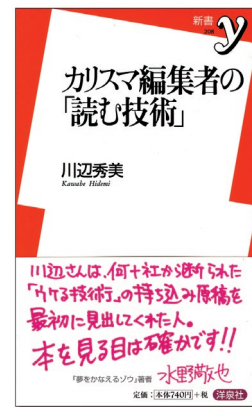
小宮 なるほど。それはその通りです。読書というのは色々幅があっ
ていいものだけど、基礎がしっかりしていないと速読も熟読もできないですからね。

川辺 そうなんです。だからいきなり各論に行かないで、基本的なところで「本を読むということはどういう行為なのか」、そこを出発点として書きました。だから小宮先生の本とは対照的に、あえて「万人にとっての名著は存在しない」という観点から「お薦め本リスト」などを挙げない構成にしたんです。

小宮 僕の本は川辺さんとはアプローチが逆で、僕自身が本をどう読んできたか、その読書経験を元に語ったものです。それを読んだ人が受け入れるのか、あるいは違ったやり方で本を読むのか。それは良い悪いではなく、それぞれに合うやり方（読書）をすれば良いと思っているからです。

川辺 ただ先生と僕も近いところはあって、速読に関しては意見が近い。つまり、速読というものに特殊な技術はいらないという提案です。

小宮 速読というのは本来、特殊な技術というより、非常に論



カリスマ編集者の「読む技術」
(洋泉社新書y)

理的な思考力の高さが求められる読み方です。

川辺 そうなんです。現在「速読」というテーマは世間的にはすごく人気があって、みんなそれに結構なお金を払って学んだりしている。でも僕は、読書の本当の価値というのは「速読」ではなく、「多読」にあると思っています。つまり、語彙力が最終的に、その人の思考力なのだ、という考えなのです。

「読む力」は「書く力」を養う大前提となっている

小宮 僕は『ビジネスマンのための「読書力」養成講座』でも書いたように、自分が読書する時には、速読、通読（レベル1、2）、熟読、重読と5つに分けて読んでいます。単に「情報」を取ることとして割り切って1時間で1冊を読んでもうこともあれば、1ページに1時間かける読書をすることもあります。どちらが良いということではなくて、必要なのは目的によって読書法を使いわけるといことです。

川辺 つまり、目的に合わせて読み方を変えていけばいいわけですね。でもそのためにはまず「読む力」を鍛えないといけない。「読む力」というのはサッカーで言えばゴールキーパーだと考えるとわかりやすいんですが、まずは情報を正確にキャッチすること、その情報に付随するコンテキスト（文脈）も含めて理解することが必要なんです。そこを間違えるとすべてが間違ってしまう。逆にその「読む力」さえきっちり身につけば、アウトプットとしての「書く力」は驚くほど簡単に身につくも

のだと思います。「書く力」というのは同じサッカーの喩えで言うとフォワードに当たるのですが、「読む力」がついてしまえば、アウトプットする力も自動的についていく。本当はシンプルで簡単なことなんです。

小宮 そうですね。

川辺 でも今、キャッチする力も書く力もない人が本当に増えているわけです。僕はそれは教育に問題があるからだと思っているのですが。

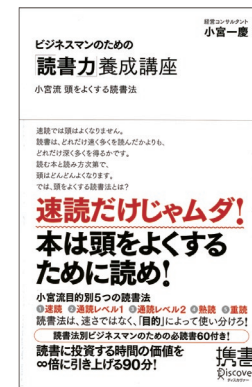
小宮 大学の教壇に立つ人間として、まったく同感です（笑）。今の学生の読解力のなさはかなり根の深い問題です。院生でも本を読むことが苦痛だと言うんですから。

川辺 それは……（笑）。でもどの大学もそうみたいですね。今の状況で言えば、大学を卒業しても本を読む、あるいは文章を書くという教育がちゃんとなされてきたとは思えない人たちが大勢います。昨日もある会社の人事の方と話していましたが、報告書一枚でも残業しながら書くと聞きました。

小宮 ……（笑）。

川辺 大手の出版社でさえ内定者が小学生レベルの作文しか書けないという話も聞いたことがあります。全般的に、日本人の読み書きのレベルがすごく低下している状況です。

小宮 それは義務教育が表面的な内容しか教えていないことが



『ビジネスマンのための「読書力」養成講座』（ティスカヴァー携書）

大きいのではないのでしょうか。僕は日本の大学もアメリカの大学も両方出ているんですけど、向こうでは徹底的にレポートを書かせてトレーニングしますよ。しかもそれが論理的かどうか、すごく突き詰めて問われるわけです。でも日本ではそこまで論理力をつけるトレーニングを行わないし、学生はマンガを中心に読んでいるから論理的な思考力をつける機会がない。この本はその思考力をつける読書の仕方を説いている意味で、すごくいい本だと思いますね。

自分の仕事に関係があり、 必要性がある本を徹底的に読め

——では、これまで読書に親しみがなく、本が読めないことに悩んでいる人はどうしたらいいのでしょうか？

川辺 きっかけは何でもいいと思うんです。最初は読みやすい本で全然かまわない。

小宮 僕もそう思います。自分の経験で言えば、僕も高校2年生ぐらいまでほとんど本を読めていなかったんです。それで焦りや劣等感があったから、最初は一度観たことがある映画の本を読んだんです。そうしたら、ストーリーを知っているからわかりやすく、文章がスムーズに頭に入ってきて本を読むことが楽しくなった。

川辺 僕もまったく同じで、大学を卒業するまで読むことも書くことも大の苦手だった。だから最初のきっかけは赤川次郎さんの本ですよ。赤川さんの本って、すごくサクサク読みちゃう

じゃないですか。「自分がこんなに読めてる！」ってページをめくるのが楽しかった。

小宮 読めることの喜び。最初はそれをつかむだけでいいのではないのでしょうか。それから徐々に難易度のレベル上げていけばいいのですから。あとは「必要性」ですね。

川辺 なるほど。切羽詰った時こそ本を読み、と。

小宮 人間は本当に必要なことになれば努力を惜しみません。だから僕は「本を読めない」と漠然と悩んでいる若い人には、「まず仕事の本を読みなさい」と勧めています。そうすると内容がある程度予想できたり、わかることだし、日常仕事をしていくうえで覚えなきゃいけないことだから、良いとっかかりになるんです。

川辺 それは本当に同感ですね。僕は洋書翻訳の事業を2年前から始めたんですけど、最初は英語なんかほとんど読めなかったんです。エージェントから原稿が毎月どっさり届くんですが、最初はその書類や原書を積み上げて、眺めているだけでした。でもそんな初心者でも、仕事をこなさなきゃいけないわけで、わずか1年ぐらいで英語の速読もできるようになりました。人間、必要にかられればどうにかするように自分のほうが変化するのでしょうかね。

小宮 英語は確かにそうです。僕はアメリカに留学していたんですが、日常会話以上のきちんとした英語を使えるようになったのは、ビジネスが絡んできてからです。僕の場合で言えば、例えば100億円や200億円もする時価総額の企業を売ったり買

ったりするわけで、そういったシビアなビジネスの場では曖昧さは一切許されません。英検一級でもまったく役に立たないんです。だから本気で学ぶ気になった。それは本の読み方も一緒に、どれだけその必要性を自分が感じられるかが大事ですね。

川辺 だけど読書力って基礎体力みたいなものだから、

それを続けていかないといけない。5分でも10分でもいいから日々続けていかなければいけないことだと思うんです。読むことが日常に組み込まれていけば、読書はぜんぜん苦じゃなくなる。僕なんてほとんどもう病気なんですけれど、散々編集作業をやった後でリラックスするために別の本を読みます(笑)。だから最初はまず量をこなして慣れていくことがすごく重要なんです。

「ベスト3」の本から現在の自分、 目指すべき自分がわかる

小宮 「何から読んでいいのかわからない」という人がいま本当に多いですね。



小宮一慶氏

川辺 そのためにはまず、自分が何が好きか、何に興味があるかという自分軸を自己分析して把握しておくことが必要なんです。だからこの本では自分の「好き／嫌いリスト」を付けることを薦めています。遠回りでも、まずはそこから整理することが必要だからです。

小宮 そこがわかっていると始まらないですからね。

川辺 僕が薦めるのは、それを整理して最初は嫌いなものから取りかかるということです。人って実は、嫌いなものの中に自分のコンプレックスが隠されているんです。同時にそこに開拓すべきテーマが潜んでいる可能性がある。だから、僕はこの本の中でも「嫌いなものを救うために、好き／嫌いリストをつくる」と書いています。

小宮 おっしゃる通りで、心理学的に言っても好きなものと嫌いなものは意外と近いところにあります。嫌いというのは、実は意識していることの裏返しですからね。

川辺 そこに克服したい何かが秘められているんです。だから嫌いなものから入ると、意外と新しい世界や興味の対象が広がったりする。新鮮だと感じられれば、「もっと、もっと」って



川辺秀美氏

情報を取りたくなる。それを続けていけば徐々に苦手なジャンルの本にも慣れていくものなんです。

小宮 そのやり方は実践的ですね。

川辺 そのためにはとりあえず、自分の「生涯ベスト3」の本を挙げてみる。自分のベストの3冊というのは、現在のその人を表現するものなんです。それはどんな本でもいいと思います。

小宮 それが今の学生みたいに全部マンガだったりしたら困りものですけどね(笑)。

川辺 でもそれで恥ずかしいと思えば、ちゃんとした本を読むようになるじゃないですか(笑)。ちなみに、小宮先生のベスト3をうかがってもよろしいですか？

小宮 いろんな観点や軸からベスト3があるんですが、あえて挙げるなら、ひとつは松下幸之助さんの『道をひらく』(PHP研究所)でしょう。

川辺 名著ですね。僕も大好きな本です。

小宮 これはずっと自分のデスクに置いてあります。あとは「経営」という観点からいうと、ピーター・F・ドラッカーの『抄訳マネジメント 課題・責任・実践』(ダイヤモンド社)。これは僕にとって経営学のバイブルです。最後のひとつは野中郁次郎さんの『戦略の本質』(日本経済新聞出版社)です。この本に書かれていた社会科学と自然科学の違いは、その後の人生に大きな影響を与えてくれました。

川辺 やはり先生らしいというか、コンサルタントをされている現在の状況を適確に映し出すセレクトですね。

小宮 そう、僕は大学で会計学も教えているけれど、よって立つところは経営コンサルタントですから。愉しみとして読む読書としては文学も好きですけど、ベスト3と言えばこの3冊です。

川辺 多読の習慣をつけていくことで、そういった自分の人生に深くいい影響を与えてくれる本と自然に出会えるようにセットされていく。これも多読の効用の一つではないでしょうか。

小宮 そうです。外的な必要性からはじまったことでも、多読を続けることで人は自分の内的な必要性に応じて本を選べるように変化していく。そこに必ず各人にとっての名著との出会いもあります。いずれにせよ、川辺さんがこの本の中でおっしゃられているように、本を多く読んでいくことによってそれは見つけられます。やっぱり、テレビやウェブではなく1冊の本でしか学べないものが確かにあるんですよ。言い方を換えると「本で得た知識はストック化できる」んです。それを意識して本を読んでほしいですね。

川辺 まさに言いたいことを言われてしまいました(笑)。本日は本当にありがとうございました。